

呼び出しの内線が鳴ったのは、午前十時過ぎだった。

「安堂、今すぐ来い」

たった一言で切れた通話に安堂は息をのんだ。

社長の高塚龍の声にはいつもの傲慢さと、その奥に潜む唖れた響きがあった。

（昨夜もまた眠れなかったのか）

高塚は睡眠不足で苛立つと決まって安堂を呼びつけるのだ。

安堂は深く息をつき、手元の書類を整える。

カントリーボーイという体質に興味を持たれ、高塚に目をつけられてからは、このセフレ関係が続いている。

こんな関係はいけないとわかっている。わかっている、呼ばれれば足が向いてしまう。

高塚という男の放つ支配的な空氣に、身体が抗えなくなるのだ。社長室の扉をノックすれば、即座に「入れ」と短い返事。

中に入ると、椅子に深く腰掛けた高塚が口元に笑みを浮かべていた。

「鍵をかけろ」

命令に従い、カチャリと鍵を回す。

これから高塚にされることを想像して、安堂の体がじわりと熱くなっていく。

「机の前に来い」

指示に従い歩み寄る。高塚の指が、安堂のベルトに触れた。

「……あ……社長、まだ仕事か」

「そうだな。手短に済ませる」

そう言つて高塚は安堂の身体を軽々と抱え上げた。

机の上に座らされ、ひやりとした木の感触が太腿に伝わる。

「下を脱いで足を開け」

羞恥に顔が熱くなる。それでも、安堂は震える手でスラックスと下着をずり下げた。

机の冷たさが、露出した臀部に直接触れる。

高塚は安堂の前に跪き、開かれた両脚の間に顔を寄せる。熱い吐息が秘部にかかるだけで、安堂の身体は微かに震えた。

「んっ」

「もう準備ができているじゃないか」

「ち、違います……っ」

「こんなに濡れているのに嘘をつくな」

高塚の舌が、割れ目をゆっくりと這う。その一瞬で、安堂の背筋に電気が走り、咄嗟に唇を噛む。

「んんっ♡」

「声を我慢する気か？」

「っ、だって……他の人に……っ、あ……聞こえてしまいます」

「聞かせてやればいいだろ」

高塚の舌が敏感な突起を捉える。クリトリスを丁寧に舐め上げられ、安堂の腰が跳ねた。

「ひうっ♡」

ちゅうつと吸い上げられる感覚に、頭の芯が溶けていく。

高塚の舌技は巧みで、どこをどう舐めれば安堂が堕ちるかを熟知していた。

「あっ♡ もう……そろそろ終わりに……っあ♡」

「ダメだ。まだ舐めたりない」

唾液と愛液が混ざり合い、ぬらぬらと光る秘部を、高塚は丹念に舐め続ける。

時折、歯を立てるように甘噛みされ、そのたびに安堂の身体はびくと跳ねた。

「あっ♡ 社長、も、う無理……です」

高塚の指が膣内に進入してきた。中を探るように動かされ、ぐちゅぐちゅと淫らな音が社長室に響く。

「あう♡ んう♡」

（抵抗しないといけないのに……っ、気持ち良すぎておかしくなりそうだ）

指は二本、三本と増え、敏感な箇所を抉られるたびに、安堂の意識は遠のきそうになる。

びくんびくんと絶頂が連続する。快感の波に飲まれながら、安堂は机の端を掴んで必死に耐えた。

「ふ、っん♡んあ♡」

「はあ……すごいな。こんなに出して」

高塚が顔を上げると、その口元が濡れていた。彼はそれを舐め取り、満足げに笑う。

「今日はこれで解放してやる」

高塚は机の引き出しから小さなバイブを取り出すと、安堂の膣内にゆっくりと挿入した。

「ひあ！」

収まった違和感に、安堂は息を飲む。

「これをつけて仕事をしろ」

「む、無理です！」

「やれ」

有無を言わさぬ口調で、高塚は安堂のスラックスを履かせた。中でバイブが存在を主張する。

（こんなの絶対集中できない……！）

股の間に収まった異物の感覚に、歩くたびに微かな快感が走った。

「もう仕事に戻っていいぞ」

「……っ、はい」

退室の許可を得て、安堂はふらつく足取りで社長室を出た。

廊下を歩くたびに、膣内のバイブがわずかに動く。

(うぁ……っ)

違和感と羞恥で頭がくらくらした。

それでも、秘書としての仕事はこなさなければならない。安堂は必死に気を紛らわせ、会議の準備に取り掛かった。

社内は静かで、同僚たちがそれぞれの業務に集中している。

安堂はパソコンに向かい、文字を打ち込みながら、身体の奥底でくすぶる熱を無視しようと努めた。

だが、それは突然訪れた。

——ブブブブ！

「っ！」

膣内のバイブが、遠隔操作で数秒間振動した。

(今一瞬、スイッチが……！)

予想外の刺激に、安堂の手が震える。口元を手で覆い、なんとか声を殺した。

「安堂さん？　どうかしましたか？」

隣の席の女性社員が心配そうに声をかける。

「い、いえ……ちよつと、コーヒーを零しそうになって」

なんとか言い訳をする。心臓が高鳴り、顔が火照っていく。

（絶対にバレないようにしないと）

気を引き締めて、パソコンの画面を見る。今日中に片づけなければいけない仕事は、まだ三つほど残っていた。

来週の社長のスケジュールを整理し、社内会議の日程をある程度決めておく。

（あとは社長に最終確認だな）

月末の会食の場所の手配も終わり、今日中に必ず終わらせておかなければいけない仕事は、残すところひとつだった。

明日の商談用の資料に目を通し、一部修正をしていく。

「安堂、商談の資料はどうなってる？」

「今画像の差し替えをしているので……っ、それが終わり次第、共有フォルダに保存します」

先輩に気づかれないように必死にポーカーフェイスで、受け答えをする。けれど、心臓はバクバクと激しい音を立てていた。

こうしている間も、時折バイブが作動するのだ。

振動のたびに安堂は奥歯を噛みしめ、必死に耐える。

業務どころではない。頭の中は快感と緊張でいっぱいだった。

安堂は何度も時計を見て、時刻を確認する。

(……早く……社長のもとに……)

昼休みになった瞬間、安堂は立ち上がった。

足早に社長室へ向かい、ノックをする。許可が下りると、安堂は急いで社長室に入り、自ら鍵を閉めた。

「どうした？」

高塚はソファで寛ぎながら、こちらを見た。その瞳に勝ち誇ったような光が宿っている。

「社長……」

「なにか用か？」

わかっていて問う高塚に、安堂は唇を嚙んだ。

顔が真っ赤に染まっているのが自分でもわかる。羞恥と欲求が入り

混じり、言葉が出てこない。

「昼食にでも誘いにきたのか？」

安堂は高塚のもとへ歩み寄ると、自ら唇を重ねた。

「……社長のをください」

「随分と素直じゃないか」

高塚が立ち上がり、覆い被さるように安堂を見下ろす。安堂は一步後退したが、すぐに壁に追い詰められた。

「脱げ」

従順にストラックスを下ろすと、下着はすでにぐっしりと濡れていた。バイブを取り出せば、粘つく愛液が糸を引く。

「美味そうだな」

高塚はその場に跪き、安堂の前に顔を寄せた。そして、しゃぶりつ

くようにクリトリスを吸い上げる。

「ああああんっ♡」

「おい、声を我慢するんじゃないのか？ それともそんなに欲しくてたまらなかったのか」

「あう♡ あああああ♡」

高塚の舌が敏感な突起を舐め回す。安堂の腰が自然に動き、もっと深くを求めてしまう。

「しゃ、社長、もっとっ……ああ♡」

「どこを、どうしてほしいんだ？ ちゃんと言葉にしろ」

「あ♡ あああ♡ ク……クリトリスを……っああ♡ もっと舐めて吸ってください……ああん♡」

高塚がバイブを再び中に入れ、スイッチを入れると、振動が膣内を

刺激した。

「ひあっ♡」

「こんな甘ったるい声、他のやつには聞かせなかっただろうな」

「き、聞かせていません……っ！ 社長にだけですっ！ あ♡ ああ

♡」

高塚は立ち上がり、安堂の耳元に顔を寄せた。ねっとりとした舌が耳朶を舐める。そのたびに、安堂の身体は大きく震えた。

（ダメだ……気持ち良すぎてどうにかなりそうだ！）

「あ♡ ああ♡」

「他にどうしてほしい」

「ああ♡ 社長の……っ、おちんちんをください……っ♡」

「いい子だ」

高塚は満足げに笑い、安堂の身体をソファに押し倒した。後ろから勢いよく貫かれる。